

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<研究ノート> 『雨月物語』 序の最初の二文

著者	加藤 昌嘉
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	89
ページ	54-59
発行年	2014-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/11624

〈研究ノート〉

『雨月物語』序の最初の二文

加藤 昌嘉

本年度、「古文・漢文の基礎」という学部学生向けの授業で、「日本人が書いた漢文」として、『雨月物語』の序を読んでみた。その際、諸注を比較したのだが、その訓読を見て不審に思う点があったので、ここで検討してみたい。

『雨月物語』の序の最初の部分を掲げる。原文（版本）には、返り点や振り仮名は付されていない。

雨月物語序

羅子撰水滸而三世生啞兒。

紫媛著源語而一旦墮惡趣者。

蓋為業所偈耳。

然而觀其文各々奮奇態……以下略……

鵜月評釈に掲載された版本の影印、および、インターネットサイト「東京大学総合博物館」<http://www.u-n-tokyo.ac.jp/>

DM_CD/DM_CONT/UGETSU/HOME.HTM 掲載の版本の影印に拠り、諸注を参観しながら活字化したものである。○は、読点句点を表す記号とおぼしい。改行位置は、私意による。

例えば、新編全集は、これを次のように訓読している。その現代語訳も掲げておく。

羅子^{らし}は水滸^みを撰し、而して三世啞兒^{あじ}を生み、紫媛^{しえん}は源語^{げんご}を著し、而して一旦惡趣^おに墮^おつる者、蓋^{けだ}し業^{げふ}を為すことの偈^{せま}る所耳。然り而して其の文を觀るに、各々奇態を奮ひ、……以下略……

〔訳〕

羅貫中は水滸伝を著して、ために子孫三代啞の子が生まれ、紫式部は源氏物語を著して、ために一度は地獄に墮ちたというが、それは思うに、彼らがあらぬ嘘物語を書いて世の人々を迷わせた所行の報いが身に迫ったのである。しかしながら、その文章を見ると、それぞれ変った場面、情景に富み、……以下略……

▼問題の一つめは、三行目「者」の訓み方である。

全書・重友評釈・新潮集成は、「者」を「ものは、」と訓んでいるが、「もの」と「は」を併せて訓むことはあるまい。鈴木評釈は、「者」を「と、」と訓んでいるが、どういう判断なのか不明。

一方、右の新編全集や、学術文庫・旺文社文庫・ちくま文庫・ソフィア文庫など、多くは、「者」を「は、」と訓んでいる。「羅子撰水滸而三世生啞兒、紫媛著源語而一旦墮惡趣」という対句の二三字を、主部のように解しているわけである。

たしかに、『古今和歌集』真名序は、「夫和歌者（それと和歌は）」という文句で始まっている（『新日本古典文学大系 古今和歌集』二三八頁。学習院大学蔵・三条西家本『伊勢物語』の付属文書は、「此伊勢物語者（この伊勢物語は）」という文句で始まっている（『全対訳日本古典新書 伊勢物語』二二二頁）。

しかし、対句になっている二字もの長文が主部で、たった六字が述部というのは、何とも頭でっかちな文ではないだろうか。ここは、羅貫中や紫式部がフィクション（嘘話）を書いたが故に末路悲惨になったという伝承を述べた対句部分なのだから、「者」と句点で切って、「てへり。」と訓むべきではないだろうか。

「者（てへり）。」は、「と云へり。」である。「〜ということだ。」「〜というわけだ。」の意。平安時代以降の漢文でまま使われる。『日本国語大辞典 第二版』（小学館）は、『色葉字類抄』の「者テヘリ 章也反」という例や、『名語記』の「書のこと」をよ

みはてととむる所に、てへりとをける如何」という例などを挙げ、語誌欄で、中国では「引用句の終結を示すために用いられていた」こと、日本では「引用の「者」の字は中古から中世にかけて慣用的に「てへり」と訓読された」ことなどを解説している（『九』五八九頁）。

例えば、『小右記』では、次のように使われている（『大日本古記録 小右記（五）』五五頁）。句読点は私意による。

太閤招呼下官云、欲説和哥、必可和者。答云、何不奉和平。又云、誇たる哥になむ有る、但非宿構者。此世をは我世とぞ思望月の虧たる事も無と思へば

【太閤、下官を招き呼びて云はく、「和哥を読まんと欲す。必ず和すべし」てへり。答へて云はく、「何ぞ和し奉らざらんか」。又云はく、「誇りたる哥になむ有る。但し宿構に非ず」てへり。「此世をば我世とぞ思ふ。望月の虧たる事も無しと思へば」】

或いは、『殿暦』では、次のように使われている（『大日本古記録 殿暦（二）』二六九頁）。句読点は私意による。

件年大殿御記云、四方拜如常者。

【件の年の大殿御記に云はく、「四方拜、常の如し」てへり。】前者は、藤原道長の発言の末尾に「者」が置かれた例。後者は、「大殿御記」からの引用文の末尾に「者」が置かれた例。『雨月物語』序の用法は後者に近く、どうも、「……者」を「……云々（としかじか）」のように使っているとおぼしい。

——というわけで、私は、次のように訓み、訳すこととする。羅子、水滸を撰して三世啞兒を生み、紫媛、源語を著して

一旦悪趣に墮つ、てへり。

【訳】羅貫中は水滸伝を編んで三代口がきけない子が出来、

紫式部は源氏物語を書いて一旦は地獄に墮ちた、と云う。

なお、「而」は、不読字である。「くて」という順接の接続助詞に該当する。

▼問題の二つめは、四行目「蓋為業所偏耳」の訓み方である。

大系・学術文庫・新編全集などは、「蓋し業を為すことの偏る所耳」と訓んでいる。鶴月評釈・ソフィア文庫などは、「蓋し業のために偏らるところのみ」と訓んでいる。旺文社文庫・ちくま文庫などは、「蓋し業の為に偏らるるのみ」と訓んでいる。鈴木評釈は、「蓋し業に偏らるゝのみ」と訓んでいる。

もちろん、『雨月物語』序が書かれた時点で書き手と読み手がどう音読していたかは、わからない。時代によって訓読の流儀が異なることも承知している（『漢文訓読入門』明治書院など参照）。しかし、現代の古文解釈の慣例としては、次のように点を付し、次のように訓むべきではないだろうか。

蓋 為 業 所 偏 耳。【蓋し、業の偏る所と為るのみ。】

高校生が漢文のテキストで習う、受け身の句法である。「業に迫られた」という意味に解される。

A 為 B 所 C 【A、BのCするところとなる】

という文は、本来的には、Aが主語、「為」が述語、Bが小主

語、Cが小述語で、「Aは、《BがCをする対象（相手）》に為る」という構造である。それを、日本人が、意識的に、「Aは、BにCされる」という受け身で解しているわけである（『全訳漢辞海 第三版』五六五頁、八七〇頁参照）。『雨月物語』諸注

の中では、全書・重友評釈・新潮集成が、そう訓んでいる。諸注の訓読がてんでばらばらであることについて、鶴月評釈は、「秋成の表現が的確性を欠いていたからである」と述べているが、まったく賛成できない。この構文は、諸文献に例があり、「秋成の表現が的確性を欠いてい」るわけではない。

高校生なら、『漢文句法 演習ドリル』（旺文社）から、『稽神録』の例を拾うことができる（五八頁）。

所 居 為 山 水 所 侵。

【居る所、山水の侵す所と為る。】

『新訂 漢文法要説』（朋友書店）からは、『史記』の例を拾うことができる（一〇七頁）。

後 則 為 人 所 制。

【後るれば、則ち、人の制する所と為る。】

——というわけで、私は、次のように訓み、訳することとする。

蓋し、業の偏る所と為るのみ。

【訳】要するに、（彼らは）業に迫られたのだ。

なお、「蓋」は、「おそらくそれは……」「要するにそれは……」と、前文を説明せんとするもの。また、「耳」は「のみ」を訓むが、上に「唯」「独」という副詞はないので「だけ」と訳す

必要はない。「也」や「矣」と同じく、「……のである。」「……なのだ。」の意。

ただし、「業」をどう訳すべきか、よくわからない。

この部分を、ちくま文庫は、「それはおそらく自業自得というものである」と訳しているが、どういう解釈であらうか。ソフィア文庫は、「それはおもうに彼等が架空の物語や狂言綺語を書いて世の人々を惑わせた悪業のために、そのむくいを身に受けたというべきであらう」と訳している。「業」を、「悪業」と翻訳したのか、「報い」と翻訳したのか、判然としない。

一方、長島は、「真実に見まがうような嘘の話を書いて、人心を迷わせた報いに迫られたものであらう」と訳している。「BにCされる」という構文が正しく解されていて、最も明瞭である。「業」を「報い」に翻訳しているわけだが、これが妥当であらうか。「業」の用例、「偈」の用例を閲して、なお熟考したい。

▼問題の三つめは、五行目「然而」の訓み方である。

諸注は、皆、「然り而して（しかりしかうして）」と訓んでいる。鈴木評釈は、「然して（しかして）」と訓んでいる。これでは、順接になってしまう。

もちろん、『雨月物語』序が書かれた時点で書き手と読み手がどう音読していたのかは、わからない。しかし、現代の古文解釈の慣例としては、「然而」は、「しかれども」と訓むべきものではないだらうか（『角川 大辞源』一一〇五頁。『小学館 古語大辞典』は、『名義抄』の「然而 シカレトモ」という例を挙げている（七五二頁）。

例えば、『新日本古典文学大系 萬葉集』でも、原文に「然而」とある部分は、「然れども」と訓んでいる（「二」五〇九頁）。一方、『新日本古典文学大系 六百番歌合』（岩波書店）では、判詞の中に「然而」が出て来たときは、「しかるを」というルビを付けている（二八頁）。いずれも、逆接である。

鈴木恵「然而」をめぐって^①が挙げる諸文献・先行論文によると、「然而」は、一六世紀末までは「しかれども」と訓まれるのが常で、後代、「しかりしかうして」という訓みもなされたようである（「後代」というのがいつなのか不明のだが）。『雨月物語』刊行当時、「然而」がどう訓まれていたか、用例を博搜してみる必要もあらう。

とまれ、『雨月物語』序、劈頭は、「羅貫中や紫式部はフィクションを書いて末路悲惨になったと云われている。それは因果応報なのだ。しかし、その文章は、奇抜迫真、読者を感動させるもので……」というロジックと解される（もちろん、先行諸注も、おおむねそう解しているわけだが）。

以上、『雨月物語』序の最初の二文について、訓読の不審点を挙げ、検討してみた。以降も気になる箇所があり、例えば、

可見鑑事実于千古焉。

という箇所は、どう訓むのかわからない。改めて検討したい。また、末尾の、

題目 雨月物語。云。

という箇所も、どう訓むのか、戸惑う。諸注は、「題して雨月物語と曰ふと云ふ。」と訓んでいるのだけれども、「題して曰く雨月物語と云ふ。」と訓むべきであろうか。或いは、「題して雨月物語と曰ふ。——としかじか。」のような意味かと考えたりもする（が、そうなると、引用・伝聞の形になり、問題が複雑になる）。改めて検討したい。

私は近世文学も漢文学も専門としておらず、上田秋成の他の文章についても近世の漢文訓読についても無知に等しい。また、当時の訓み方を復元することと現代の注釈者として訓読することが別問題であることも承知している。諸賢の批正を俟ちたい。

注

(1) 鈴木忠「然而」をめぐって」(鎌倉時代語研究会 編『鎌倉時代語研究(六)』武蔵野書院、一九八三年)

(2) なお、広瀬旭荘の「題大槻磐溪詩集」の中に、

我聞文章経国之大業

不朽之盛事

然而作者寥寥如晨星

というくだりがあるのだが、『新編日本古典文学全集 日本漢詩集』(小学館)は、「然而」を、「然り而して」と訓み、「そうとはいうものの」と訳している(五二九頁)。近世にはどのように訓むのが常であったのか、示教を請いたいところで

ある。

参考文献

先行注として、左のものを参照した。言及する場合は、以下の略称を用いる。

- ・鈴木評釈……鈴木敏也『新註雨月物語評釈』(精文堂書店、一九二九年)
- ・全書……重友毅『日本古典全書 上田秋成集』(朝日新聞社、一九五七年)
- ・大系……中村幸彦『日本古典文学大系 上田秋成集』(岩波書店、一九五九年)
- ・重友評釈……重友毅『雨月物語評釈 増訂版』(明治書院、一九六一年三版)
- ・鵜月評釈……鵜月洋『雨月物語評釈』(角川書店、一九六九年)
- ・新潮集成……浅野三平『新潮日本古典集成 雨月物語・癩癖談』(新潮社、一九七九年)
- ・学術文庫……青木正次『雨月物語 全訳注(上)』(講談社学術文庫、一九八一年)
- ・古典編……日野龍夫『日本の文学古典編 雨月物語』(ほるぷ出版、一九八六年)
- ・旺文社文庫……大輪靖宏『対訳古典シリーズ 雨月物語』(旺文社文庫、一九九二年重版)
- ・ちくま文庫……高田衛・稲田篤信『訳注日本の古典 雨月物語』(ちくま学芸文庫、一九九七年)
- ・長島……長島弘明『雨月物語の成立』(『雨月物語の世界』ちく

ま学芸文庫、一九九八年）

・井上…… 井上泰至『『雨月物語』序文考』（『雨月物語論』笠間書院、一九九九年）

・新編全集…… 高田衛『新編日本古典文学全集 英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（小学館、二〇〇三年第三刷）

・ソフィア文庫…… 鵜月洋『改訂版 雨月物語』（角川ソフィア文庫、二〇〇六年）

付記

なお、紫式部墮地獄伝説については、『今鏡』の「作り物語のゆくえ」、『宝物集』巻五、『源氏一品経表白』などを参照のこと。以下の論著に、諸資料が網羅されている。

伊井春樹『源氏物語の伝説』（昭和出版、一九七六年）

伊井春樹『源氏物語の謎』（三省堂、一九八三年）

三角洋一『源氏物語伝説』（今井卓爾ほか編『源氏物語講座（八）源氏物語の本文と受容』勉誠社、一九九二年）

（かとう まさよし・本学教授）